

# 子どもと共なる日々



山本 秀子

今、我が娘は三歳五か月。この頃「自分は女の子」と感じ

はじめている。以前は抱き人形よりも赤レンジャーの人形をおぶって満足しており、二歳半頃は、友達から「祐ちゃん、(娘の名)おんな?」ときかれると、「ちがう、お姉ちゃん!」と怒りながらトンチンカンな返事をしていた。

でもこの頃、急にスカートとピンク色に凝り、「祐ちゃん、おんな。まきちゃん(友達の名)も。お母さんも」となり、男児向けのテレビ番組も、まず「男のものねえ」と言ってみる。そして、やっぱり熱心に見る。とても迷いを感じつ

つ……。そんな心の動きがわかり、何とも楽しい。

「我が子の見え方、感じ方」はこの三年半位の間に、いろいろ変ってきた。いくつかのエピソードとともに思い返してみたいと思う。

\*

## ○哺乳瓶からコップへ

母乳をやめて、いやがる哺乳瓶を何とか使えるようになったのが八か月頃。保健所などの指導によると、一歳過ぎれば哺乳瓶はやめ、コップで飲ませよとのこと。それではと、コップを使うことを始めてみたが、ゴックンと飲み込むことがなかなかうまくいかない、コップに牛乳を入れても全く飲んでくれない。そんなこんなで、相変らず哺乳瓶を使っていた。あちこちから「もう哺乳瓶はやめたでしようね？」と当然のことのようにいわれる。しかし、「何といても、ゴロンと横になりゆったりしたい時に、瓶で飲むのは最高の楽しみ」という表情で瓶を使う彼女をみると、取り上げるのは何とも酷なのである。牛乳以外のものも喜んで食べるし、寝際には飲まないし、といくつかをおさえて、「一週間、泣かせてもらんなさい。とれますよ」

といわれたことを頭の隅に押しやった。いくところまでいってみよう、親が気にしなければいい、と思いつつた。

友達が家を覗いて、瓶で飲んでいる祐子を見、「赤ちゃんノ」という。「赤ちゃんじゃない」と抗戦。しかしシヨック

クだったのか、後でまた「祐ちゃん、赤ちゃんじゃない」といってみる。父親に「やめるノ」といわれ、隅っこでくわえていたり、瓶をみると「またお父さんにいわれるかな」といってみたり、彼女なりに、瓶をやめる心の準備をしているのが感じられる。一方、瓶も、先のゴムが噛み切れ、中のものがジョボジョボ出る状態になっていた。三歳間近、「もう使えないね」とコップにストローをつけてあげると、もう「ピン」といわなくなった。

子どもとの生活の各所で、その子どもと、どう対するか自分が問われる。やめた方がよいとわかっている、そこで泣かせて突き放すか、与えるか、それはもはや情の問題になってきて、子どもと対した自分との闘いの気がする。当然そこには、自分の育ってきた歴史もからんでくるし、父親のそれも入ってくる。「子どもを育てる」という一方的なことではなく、親も子もからみあって、「生き方を探っていく」ことが育児なのかもしれない。

今思うと、はじめの頃は随分、不必要なこともし、力みすぎてくたびれてもいた。『自分の子』という実感が何とも緊張したものだった。しかし、その無駄とも思える中から、自分に向っての反応に一層かわいさを感じ、自分がそ

の中にまぎこまれての感激を得てきた気がする。

そして今は、子どもとの生活にのめりこんだ感じができつつある。『自分の子』という実感が穏やかな、しかもはずみのあるものに変ってきている。そのきっかけになったのはこんなことからである。

### ○錯画から形あるものへ

我が子は三歳二か月頃まで、大人からみてよくわからぬ絵ばかり描いていた。そんな絵にも子どもなりの意味があるし、発達のプロセスとして存在すると頭でわかっているが、同年齢の子どもが形の整った絵を目の前で描くのを見ると、我が子はどうなっているのかしら、言葉で自分を表現することで事足りているからなのかしらなど、今思うと全く子どもにすまない感情にとらわれ、イライラしていた。

そんな時、本誌七六巻一二号の津守先生の「保育の体験と思索」を読み、頭を殴られる思いがした。「……形になる前に、子どもが自分から描く線がどんなに子どもの微妙な感情を表わしており……どんなに美しいものであるか

は、心を籠めて注意深く見るならばだれにでもわかる。

……」これによって、子どもの見え方が変わってきた。子どもにも一歩近づけた気がした。そして間もなく、我が子の絵が大人にもわかる形をとりはじめた。彼女は自分の中に溜めこんだものを一気に吐き出すように描き、傍の私も、その時見逃したらもう二度とみられぬという緊張で子どもをみつめるようになった。顔の形一つにも、心の中に何かがあり、それと少しでもずれると気にいらなかったり、反対に思うとおりに描けると、それまで張りつめていた緊張が、大仕事をした後のように解け、非常な満足となり、次への意欲に連なっている気がする。

この小さな身体のごとくに、そんな大きな力が潜んでいるのかと、改めて我が子を見直し、いとおしく思う。しかしこの感動は、日常の流れの中で、ともすると鈍り、子どもから離れたところで動いてしまう私だ。子どもものの絵のみならず、行動のすべてを「心を籠めて」みつめられたら、どんなに親も子どもも幸せかと、津守先生の文を読み返し、子どもものの絵を見直し、反省している。

春の陽をあびて冬眠からさめた様に、我が子は外へ向い、友達に向って心が拡がってきた。(安心しつつも、ちよっぴり寂しさを感じる)そこで、子どもが気楽に寄りつけるたまり場があまりに少ないことに気付いた。(私の周辺だけかもしれない)それには大きな理由がいくつもあるのだろうが、一番身近なところで、親自身の考え方もあげられると思う。汚れるから家には上げない。子どもと一緒に外に出ても立ってみているだけ。自分の子どもにだけ、注意の言葉だけをかけるなどなど。子どもと遊ぶお母さんが何と少ないのだろう。自分が子どもの中に入りこんで遊んで、反応が返ってきた時のあのうれしさを味わいたくないのだろうか。それとも知らないのだろうか。

狭いながらもせめて気楽に遊べる場として我が家を提供しても、井戸端会議の親集団を気にしつつ、子ども達と泥をこねていると、「ああ、あの人は元幼稚園の先生だったからよ」という調子で処理されてしまう。そして私が子ども達をみて、親は立話を楽しむ格好になってしまう。親集団が育ってこそ、子ども集団も育つと思ひ直し、子どもに關する本をまわしてみたり、預った(自然そうだった格好)

子どもを返す時意識的に子どもの話をしてみたり……。

そして今、少しずつ雰囲気が変わってきているように思う。しかし改めて、母親が(父親が)子どもと遊ぶ、遊ぶお母さんになることが必要と感ずる。それは誰にでもできることであるはずだし、そうなることで、より楽しい育児ができ、女性の一生のうちで一番、母と子、他人との関わりの中で人間として豊かに成長できるチャンスと思う。そして、子どもを内側から感ずる、そこを大切にしていける環境をつくりたいと強く思う。

これから先、幼稚園などの社会枠が身近になってくると、親も子も大きく変わってくると思う。その前の、すきまのない今を、教育的意味合云々を別にしても、存分に楽しんで子どもと共に生きていきたいと思う。このいとおしい時はもう二度とないのだから。

